

これからの技能者を支える ネットワークづくり

埼玉県立飯能高等技術専門学校 戸引 一則

1. はじめに

やる仕事が決まっているマニュアルワーカーの生産性の時代は終わり、付加価値は工場で生まれるのではなく、製品を媒介にした問題解決（ソリューション）、サービス、情報提供に移動するという¹⁾。この生産システムの変化は、デザインにおけるモノからコトへの変化と同じ文脈であろう。量から質、モノからコト、マニュアルワーカーからナレッジワーカーへの変化など、技能を取り巻く環境の変化は相互に連動している。

ナレッジ・ワーカーという言葉の背後には、間接部門としてのホワイトカラーではなく、価値を生み出す直接部門としての人や組織という意味がある。高度成長期の技能者同様、情報時代のホワイトカラーは階層化・分業の世界で全員が同じように働くアノニマスな存在であった。しかし情報時代から知識時代になると、1人ひとりが个性的に働き、そしてそれぞれがネットワークで知を結集する知識ワーカーが生産の中核になる²⁾。これからの技能者は、この変化を単にホワイトカラーの変化としてではなく、製造業を含む社会全体のパラダイムシフトとしてとらえ、また技能者が現場から離れるホワイト化としてではなく、技能における人間性の復権として前向きに受けとめて変化に対応していく必要があるのではないだろうか。

2. 技能者育成のための横の広がり

2.1 カテゴリーを超えた技能者育成

技能者の多能化は時代のニーズと言えるが、どのような形で実現が可能なのであろうか。かつての技能者は、一芸に秀でていさえすればよかった。しかし、現代の技能者は1つの技能に優れているだけでは生き残れなくなりつつあり、フレキシビリティやネットワークといった能力も新たに求められるという。とはいえ、複数の高度な技能を修得させることを、技能者育成の目標に掲げることは現実的ではない。そこで、高度な専門技能に加え、複数の職種に関する直接の技能や、それらを結合させるための技



写真1 ケープに木材を使ったカクテルドレス

能、あるいはプロフェッショナルマネージャーとしての資質を備えることが、これからの技能者の新しい評価基準となるであろう。複数の職種についての技能や関心は相互に影響し合い、異なったカテゴリーとそれぞれの技能や関心の高さは、三次元的な広がりの中で関連づけられるであろう。

「新しいアイデアは、異質のものの組み合わせから生まれる」というのがポアンカレの法則だが、専門領域が違う技能者の組み合わせを可能にしていく環境づくりが、これからの能力開発には必要なのではないだろうか。

公共と認定という枠組みを超え、洋裁の技能者育成を木工の技術がサポートした例がある。

埼玉ファッションアカデミーは、技能五輪全国大会や全国総合技能展で毎年入賞を果たしている洋裁の認定訓練校である。同校の平成11年度全国総合技能展審査作品は、「宝石箱のイメージ」のカクテルドレスで、この生徒のアイデアを実現するためには木の質感が必要だった。そこで同校では、衣服の木質部分の技術支援を当校に依頼し、作品を完成させたのである。この作品は、同展で労働大臣賞を受賞した（写真1）。

2.2 地域のアイデンティティと技能者育成

シューマッハーは、経済開発には意欲、ノウハウ、資本、販路という4つに基本条件があるとしたが、この条件は能力開発にも当てはまるのではないだろうか。

第一の条件である意欲は、開発の前提条件とも言え、向上の意欲がなければ放っておくのが援助の第一原理で、これは管理から支援の社会観の変化に対応するであろう。またノウハウの修得を中心とした従来のあり方に加え、補助金の援助や販路開拓とその整備に能力開発事業が積極的にかかわっていくことも必要かもしれない。シューマッハーが言うように、販路をつくることは、ものをつくることよりはるかに難しいために等閑にされやすいのである。また地域の人々のためにつくることは大切で、地域での循環は雇用造出にもつながる³⁾。

昨年12月、地域に根ざした専門校の催しとし

て「第一回飯能高等技術専門校即売フェスタ」が開催された。このイベントは、実習作品の即売や訓練生による実演・工作教室をメインに、わずか半日の会期だったにもかかわらず、市の農業青年会議所や地元の木工業者、食品販売業者などの協力を得て、200名を超える来場者を集めた。第一回でもあり、始まったばかりの取り組みだが、地域に根ざした能力開発の拠点づくりとして期待される場所である（今年12月8日に開催される）。

3. 技能者育成のための縦のつながり

3.1 時系列でみた技能者育成

階級がない社会を超え、選抜システムによって再び閉ざされた社会への変化を、「努力すればナント力なる」社会から「努力してもしかたがない」社会へ、そして「努力する気になれない」社会になったなどといわれるが⁴⁾、独立自営を目指し、また専門校修了後、数年の修行を経て実際に起業した木工家も少なくない。

去る11月に14の家具工房が集まり、県西部小川町にある埼玉伝統工芸会館で行われた「埼玉工房家具フェア2000」は、当校修了後、独立自営している木工家が中心となって企画された催しである。このイベントでは工房家具の展示即売のほか、工作教室や体験コーナーなどのアトラクションが行われ、それらアトラクションについての企画および運営は、当校木工工芸科の生徒が担当した。このイベントのサブタイトルは「木の仕事 - 伝統そして次世代へ - 」で、人とのかかわりのなかで培われてきた木工の技が、大量生産ではなく質にこだわる木工房の仕事のなかに継承され、さらにこの催しを助けた木工を学ぶ若者へとつながっていく（写真2, 3, 4）。

歴史の浅い工房家具であるため、試行錯誤の段階であるとしながらも、人間性、創造性を大切に、人との関係を見直し、ものづくりの原点である作ることが喜びとなるような家具づくりを目指したいと工房フェアを主催した「彩の森から」は考えている。この段階に必要なのは、作り手相互の連帯関係と使い手とのコミュニケーションであると



写真2 体験コーナー「世界の木を削る」



写真3 工房から提供された木っ端で遊ぶ



写真4 工作教室では木製のトイレトペーパーホルダーをつくった

し、年々多くの木工家が埼玉県西部地域で起業している現実と、この西部地域の特質、すなわち自然と伝統工芸とそこに受け継がれている技能があるという地域性故に、都内ではなく、あえて地元で開催したというのである。

このような作り手と地域との積極的なかわりを軸に、伝統工芸会館や専門校の後援などにより

「埼玉工房家具フェア2000」が実現した。フェアには9日間の会期中約1500名、伝統工芸会館には3000名の入館者があったという。「彩の森から」も伝統工芸会館でも今年も開催したいとしているが（今年は9月15日～24日、同会場で開催される）、専門校としても技能者育成の場として今後も積極的に参加していくべきなのであろう。つまりインターンシップとは趣が異なるが、作り手と使い手とのかかわりは、就業を控え自分と仕事とのすり合わせの機会としてとらえることができ、また修了生の起業している姿は、専門校で技能を学ぶ者にとって将来の姿を現実的なものにする良い機会となる。

3.2 マーケティングについて

欧米のデザイン事務所はデザイン活動を、マーケティングや設計といった川上から、製品の製造、供給といった事業そのものの展開や運用に至る川下をも取り込んだ形で、人間中心の思想を前面に打ち出した活動により成長を続けているという⁵⁾。また、消費者の買い方が「ニーズ」から「ウォンツ」に変わり、高感度消費の時代に入ると、マーケティングを伴わない技術開発は、ものづくりには役に立たないともいわれる⁶⁾。さらに、エジソン研究所は開発に際し、まず買い手の注目を引き、欲求をつくり上げてマーケットをつくってから研究を始め、社会のムードに人工的操作も加えながら、発表したときにはベストセラーになるという市場のシステム化を行っていたというが、このような環境研究が今後重要性を増すと考えられる⁷⁾。

他方、少子化の持つ意味も大きい。マスプロダクトで、たくさんつくっていけばよいという発想はできなくなる。高齢化社会がきて少子化が進むと、裕福な消費者たちを相手にしなくてはいけなくなり、GEが自らを「製造もするサービス業」と呼んだように、知識製造業の時代になる。ハードウェアの価値の割合は低下し、大量生産時代にはサービスだけだったソフトの内容は、リサイクルやメンテナンス、またグレードアップや問題解決・アイデアと多岐にわたるようになり、その割合も増加する⁸⁾。

このように「ものづくり」にかかわる縦の分業は

再構築され、そこには今までにない職能が誕生する可能性がある。このような趨勢のなか、技能者の意味も問い直さざるを得なくなると考えられる。「彩の森から」では、使い手に直接アピールする試みとして、パンフレットをつくっているが(写真5)、工房フェアはこの意味からも重要なイベントだったといえよう。

4. おわりに

地域のものづくりは、地域のつくり手だけでなく、つくり手と地域の住民や市町村など行政との間で育まれていくものであろう。

ゆたかな社会は、さまざまな品物に質を要求するが、それは消費者のニーズの高まりを意味し、この変化はつくり手を使い手に接近させる。ここにもう1つの地域産業振興の途がある。

平成5年版科学技術白書によれば、現代の若者は科学技術の成果に対しては強い関心(受容的関心)を示すものの、科学技術の成果が得られるまでのプロセスに対してはあまり関心(能動的関心)を示さない傾向があるという。高度に文明が発達した社会に生まれた人間は、小さい頃から便利な製品が身の回りにあふれ、科学技術の恩恵に浴しているため、それらが先人たちの努力の結晶であるというプロセスを見失い、自然物と人工物との区別がつかなくなっているという⁹⁾。

この問題についての答えが、工房フェアや専門校フェスタにはある。すなわち、つくり手と、使い手、地域住民、技能の伝承者となる子どもたちとの触れ合いを通して、ものづくりの大切さ、面白さは共有され、その過程において技能への理解や技能者の素地としての感覚が深まっていく。そしてこの素地に加え、多能化や異業種交流、また地域のアイデンティティなどが市町村や専門校の参加により促進されるなら、技能は自然な形で伝承され、技能に人間性を取り戻す個性豊かな技能者の時代へ転換していけるのではないだろうか。

最後に、ものづくりを通じた自己実現を尊重し、従来の枠組みや職種にこだわらない柔軟性の大切さ



写真5 「彩の森から」パンフレットより

を再確認させていただいた埼玉ファッションアカデミーの浜西校長、また家具づくりの新しいスタイルを提示しただけでなく、後継者の育成もイベントの1つの柱とした「彩の森から」の石橋氏をはじめとするメンバーの方々には、心より敬意を表したい。

<参考文献>

- 1) 野中郁次郎, 紺野登: 「知識経営のすすめ」, p.7-11, ちくま新書, 1999.
- 2) 前掲1)
- 3) 戸引一則: 「今日的技能者の育成について」, 埼玉県職業能力開発研究報告書, p.55-58, 2000.
- 4) 佐藤俊樹: 「不平等社会日本」, p.105-133, 中公新書, 2000.
- 5) 河原林桂一郎: 「特集: デザイン作品の審査をめぐって, デザインの評価とデザインの価値評価」, 日本デザイン学会誌, Vol.6, No.4, p.8-9, 1999.
- 6) 唐津一: 「日本経済の底力」, p.133-162, 日本経済新聞社, 1998.
- 7) 糸川英夫: 「糸川英夫の創造性組織工学講座」, p.12-27, プレジデント社, 1993.
- 8) 紺野登, 他: 「特集: インハウスデザインマネージメント, 日本型デザインマネージメントのパラダイムシフト」, 日本デザイン学会誌, Vol.7, No.2, p.18-32, 2000.
- 9) 産経新聞社会部編: 「理工教育を問う」, p.80-84, 新潮文庫, 1998.